

■創立30周年記念フォーラム

中村 哲 氏と考える アジアの平和と国際貢献

■日時 2015年6月11日(木)

■場所 ホテルオークラ福岡 4階「平安の間」

創立30周年記念フォーラム内容

■基調講演

「アフガンに生きて ～水と緑を創る～」

[講演者]



中村 哲 氏

ベシャワール会 現地代表
PMS総院長

平成22年度 第12回アジア貢献賞受賞者

1946年福岡県生まれ。九州大学医学部卒業後、国内の病院勤務を経て、1984年パキスタン北西辺境州（現：カイバル・パクトウンクワ州）の州都ベシャワールのミッション病院ハンセン病棟に赴任しパキスタン人やアフガン難民のハンセン病治療を始める。その傍ら難民キャンプでアフガン難民の一般診療に携わる。1989年よりアフガニスタン国内へ活動を広げ、山岳部医療過疎地でハンセン病や結核など貧困層に多い疾患の治療を開始。2000年からは旱魃が厳しくなるアフガニスタンで飲料水・灌漑用井戸事業を始め、2003年から農村復興の為、大がかりな水利事業に携わり現在に至る。

■パネルディスカッション

「中村哲氏と考えるアジアの平和と国際貢献」

～民間支援のあり方と地域の平和と安定に求められるもの～

[パネリスト、コーディネーター経歴]

パネリスト



深澤 良信 氏

国連ハビタット福岡本部
(アジア・太平洋地域担当)本部長

1957年静岡県生まれ。1982年国土庁（現：国土交通省）入庁。国連人間居住センター（ハビタット：ケニア）居住専門官、国連人道問題局（スイス）救援調整部救援調査官（アジア担当）、総務省消防庁国民保護・防災部参事官等を経て2013年6月より現職。国土計画、開発政策、災害・防災を専門に、アジア太平洋地域の居住環境問題の改善に取り組む。



二ノ坂 保喜 氏

NPO法人バングラデシュと手をつなぐ会 代表

平成20年度 第10回アジア貢献賞受賞者

1950年長崎県生まれ。長崎大学医学部卒。長崎大学第一外科研修後、救急医療、地域医療の現場で経験を重ね、1996年福岡市野芥に「いのさかクリニック」を開業、在宅ホスピスに取り組む。同時に、バングラデシュと手をつなぐ会の代表として、保健医療と教育の分野での協力を行う。現在は現地NGOと協力の下、看護学校建設プロジェクトに取り組んでいる。2014年地域医療の貢献した医師を顕著する日本医師会赤ひげ大賞受賞。



中原 正孝 氏

独立行政法人国際協力機構 客員専門員
前南アジア部長

1978年国際協力事業団（現：国際協力機構）入団。1999年パキスタン事務所長、2005年アフガニスタン事務所長、2008年から2013年まで南アジア部部長としてJICAのアフガニスタン支援を統括。同期間中にベシャワール会の現地プロジェクトを支援。2013年より現職。アフガニスタン農業省支援のJICAリーダーも務める。福岡県出身。



原田 正隆 氏

西日本新聞社東京支社 編集長

1982年西日本新聞社入社。社会部、東京支社報道部、2005年ソウル特派員、2008年長崎総局長、2013年報道センター長を経て2014年8月より現職。2001年から2002年アフガニスタン、パキスタンでベシャワール会の現地活動取材。インドや東ティモールなどの取材記事多数。

■参加者数 624名

パネルディスカッション

「中村 哲 氏と考える アジアの平和と国際貢献」

～民間支援のあり方と地域の平和と安定に求められるもの～

中村氏の基調講演に引き続き、西日本新聞社の原田氏のコーディネートのもとで、国連ハビタットの深澤氏、バングラデシュと手をつなぐ会の二ノ坂氏、JICAの中原氏に加わっていただき、「アジアの平和に私たちは何ができるか」をテーマに議論していただきました。熱を帯びた議論に、定員を上回る700名近い参加者の皆さんも最後まで真摯に耳を傾けていました。

■さまざまな立場からの国際支援。

原田 まずはお三方にご自身の活動内容についてお伺いしたいと思います。中原さんからお願いします。



中原 はい、JICAでは2001年から、日本政府を含めてアフガニスタンでの復興支援を進めてきました。その結果、教育や政治、ビジネスなど国民の機会が大きく広がりました。基礎教育の就学率の向上、特に女性については2001年当時ほぼゼロだったのが、2013年には女子1000万人中400万人が就学するほどの成果を上げています。

このほか保健医療、農村開発、メディア、国際空港の建設など様々な成果が見られます。また現在私は、稲作普及と農業省の組織強化という二つのプロジェクトのリーダーを務めていて、稲作普及には中村先生のペシャワール会医療サービス（PMS）との共同事業も含まれています。PMSとのご縁は2010年、私が先生の講演会に参加した際、先生に「JICAとしても何かお手伝いを」とお声掛けしたのがきっかけです。最近ではアフガニスタンの農村開発復興大臣が筑後川の山田堰をご覧になり、今回の現地水利事業をアフガン復興のモデルにしたいとおっしゃるなど、広がりを見せています。

原田 ありがとうございます。復興支援の課題などについてもご紹介いただけますか。

中原 この十数年の復興支援の影の部分、やはり格差の拡大です。貧富の差はもとより、都市と農村の格差も広がり、残念ながら汚職も増えています。大きな課題は治安の悪化で、地域によっては我々 JICAの

西日本国際財団 創立30周年記念フォーラム ～中村 哲氏と考えるアジアの平和と国際貢献～

西日本国際財団 創立30周年記念フォーラム

パネルディスカッション

「中村哲氏と考えるアジアの平和と国際貢献」
～民間支援のあり方と地域の平和と安定に求められるもの～



人間も現場に足を踏み入れ難い状況です。

こうした中で、これまでの教育や保健医療などの成果を誰がどう維持していくか、また職業教育など人口の6割を占める22歳以下の若年層対応や継続的な農業開発など課題は山積しています。復興支援に必要なものは、息の長い支援、辛抱強い対話、地域の主体性の尊重など種々ありますが、やはり一番肝心なのは、人々に届く支援を常に念頭に置くことではないかと思います。

■自主自立につながるサポートを。

原田 続いて深澤さん、国連ハビタット福岡本部（ア

ジア太平洋地域担当）が福岡市にできて18年になりますが、九州唯一の国連機関として、いかがでしょう。

深澤 私どもは、まさに西はアフガニスタンから東は太平洋地域に至る28カ国をカバーし、災害復興や戦災復興、都市の貧困対策など約80本のプロジェクトを39カ国もの多国籍チームで一生懸命取り組んでいます。さきほど中村先生から、現地の人たちが主導で頑張ってもらおうというお話がありました。これはまさに私たちが30年間ずっと大事にして実践してきたことですので、大いに感銘を受け、意を強くした次第です。

アフガニスタンにおける住宅や生活インフラ改善のお手伝いに際しても、幼稚園や側溝といった工事の優先順位の決定から、物を買ったりコンクリをこねたり帳簿つけまで、地域の人たちに自らやってもらう。その過程でコミュニティが再生する、リーダーが生まれて地域が次に進む力を得るという目に見えない成果、これがとても大事なんですね。私たちは、こうしたコミュニティと直接対話しながら事業を進めてきました。しかし近年はまず政府にしっかりしてもらおうということで、私たちは一歩引き、政府と地域の対話を後方支援するやり方に切り替えています。

原田 次に二ノ坂さん、組織の活動の特徴について、民間ならではの苦勞も交えてお願いします。

二ノ坂 私は医者でもありますので、中村さんが医者でありながらシヨベルカーを操るお話を聞き、私がバン

グラデシュの手伝いをするくらいは軽いことだと安心しました。私が「バングラデシュと手をつなぐ会」と出会ったのは、死と向き合う患者さんやご家族をサポートする在宅医療を始めた時期。現地でいろんな命の姿、生まれてすぐ亡くなる子どもやお母さんたちの姿を見ながら、現地に対して何かできることはないかと考えながらやってきました。もう27年になります。現地で小学校や母子保健センターなどを作ってきましたが、最終的には人づくり、地域づくりが自分のテーマだと思うようになりました。教育と保健医療ですね。どちらも人を作る、命を支えるという意味で非常に重要です。



バングラデシュでは、日本を上回る人口1億6000万人に対して医者は5万人で看護師は3万人。日本はそれぞれ20万人、150万人ですから、とても少ない。出産は命がけで、子どもが育ちにくい。助ける人がいないわけですから。そこで現在、看護学校の建設に力を入れています。私たちは福岡に事務所を置く小さなNPOですので、慢性的な人材不足で時間もお金も足りないのも事実ですが、常に自問自答しているのは、本当の意味で現地のことを知り、理解すること、できていくのかということ。中村さんのお話を聞き、現地で一緒に暮らしながらその人たちのニーズを作る、あるいは見出していく努力は本当にすごいと思いました。

原田 現地のニーズ、思いを知る。大変重要なキーワードが出てきました。中村さん、1000人以上もの現地スタッフを動かす秘訣といったものはありますか。

中村 医者の特権というか、女性の問題や家庭の問題など普段言えないことも医者なら口を開く。そうして住民の本音を知ることができたというのは一つあると思います。もう一つは率先してやることです。外国人不信が非常に強い中で信頼を得るには、何かを実際にやる、約束を守る。民話の中に、約束の日に会うた

めに自決して魂になって会いに行くという話があるぐらい、本当に人と人が交わす約束というのは大事です。現地で生きるために必要なものを一緒に求め、それを行動で示せば、よほどの屁理屈な人でない限り一緒にやれるというのが私の体験です。

■現地の人々と目線を合わせ、ともに動く

原田 ありがとうございます。では次に、長年の活動を支えてきた原動力、やりがいについて皆さんに伺います。
深澤 何と言っても、「コミュニティと直接仕事をする」ことがエネルギーの源です。例えばスリランカ北部の戦災復興支援事業。内戦で夫を失った女性の家が再建され、手づくりの竣工式が開かれた際の、奥さんの本当に嬉しそうな笑顔といったら。全ての悩みや疲れが吹っ飛び、また頑張ろうという気持ちになります。うちの職員は皆こうした気持ちを持っています。

中原 何より、この仕事は「国と国、人と人との結びつきが非常に強い」ということ。私は80年代初めのネパール以来、各国に赴任しましたが、どの国でも現地の人たちと一緒に取り組んでいることを強く感じました。とりわけ印象深いのが東日本大震災の際のモルディブから日本への支援。人口20万人のインド洋の小さな島国が、60万個もの魚の缶詰を供与してくれたのです。すぐ在京のモルディブ大使へお礼に伺うと、日本がスマトラ沖の大地震の際に津波防止の工事をしたこと、海沿いのたくさんの島に小学校を建設したことをモルディブの皆さんがずっと覚えているというのです。だからこそ震災直後に「今度は自分たちが返す番だ」と、全島あげて60万個もの缶詰をと。私はこの話に一番感動しました。

二ノ坂 私は二つ、「つながり」と「夢」を挙げたいと思います。つながりとは国内外を問わず、ともに努力する仲間たちのことです。現地のヘルスワーカーたちは、保健制度も医療機関もほとんどないマイナスの地点か



ら、大変な覚悟を持って頑張っています。私たちはつい自分たちが援助してあげていると思いがちですが、それは単に両国の経済格差の反映であって、決して私たちが人間的に優れているから指導できるわけではありません。視野を広げてくれる現地の人たちとのつながり、そして日本で支えてくれる人たちとのつながりというのが大きなポイントです。

もう一つ、夢を実現したいという気持ちです。国内では今の在宅ホスピスを子どもホスピスに広げていくこと。障がいを持った子ども、病気を持った子ども、命が限られている子どもたちに対して、地域の皆でケアする仕組みを作りたいのです。そして、先ほどもお話ししたバングラデシュに看護学校を作る目標。女性の自立や安全な出産環境、子どもたちが健やかに安心して成長できるような地域を作っていく。こうした夢が私の原動力です。

中村 何が原動力か、これが本当に自分でもよく分からない。あえて言葉にするなら、「大和魂」ですね。本居宣長の。そこに困っている人、倒れている人がいれば、放っておけない。日本人が失いかけている情ですね。人間愛とか、そんな歯の浮くような言葉より、ここで引き下がっては九州の男がすたとかという方が、よほどしっくりくる。そういうものを大切にすることが私は大事なんじゃないかと思いますね。

■日本らしい、九州らしい国際貢献とは。

原田 ありがとうございます。それでは最後に、日本人だからこそできる、あるいは九州ならではの国際貢献はどういったものか、皆さんに伺いたいと思います。

二ノ坂 私は昭和25年、長崎の浦上天主堂の下で生まれました。原爆で多くの人が亡くなったことが無意識のうちに私の中に染みついている感覚があります。その背景にあるのは、戦争や原爆投下で国と国との間で行われた歴史です。NGOをやってきて思うのは、NGOではそうした国と国の境を越えて活動し、考えることができるということ。それはとても大きな役割だろうと思うのです。私たちは今、バングラデシュのカラグニカの現地NGOとの連携を、文字通り手を携える形で進めています。福岡という一つの地方都市と現地の一つの地域とのつながりという面では、規模は全然違いますが、中村さんたちの活動と通じるところがあるのかなと勝手に思っています。

中原 日本は今でこそODAなどの支援国ですが、皆さんご承知の通り、戦後は世界最大の被支援国でした。被支援国から支援国に転じた経験があるためか、日本の国際支援には相手の目線に立って考える、一緒にやってみる姿勢が色濃い。実際、時間を守るとか整理



整頓とか、そういう基本的なところから入る専門家や技術者は、日本人くらいではないでしょうか。それと今年は青年海外協力隊の50周年ですが、福岡は全国的に見ても大変多くの人が参加しています。おそらく福岡に限らず九州の人には、外に向かって積極的に行動する気質が流れているのではないかと思います。

深澤 さきほどお話ししたように、私どもの事務所にはニューヨークと28カ国をつなぐ役割があります。実は他の国連機関の多くが、このような機能をアジアのへそにあたるバンコクに置いています。ハビタットもバンコクに移そうという声が常にありますが、やはりここ福岡にあるのが良いと思っています。国連ハビタットは福岡にあるからこそいい仕事ができるんだと、世界の評価をさらに高めたいと思っています。

中村 九州は東北と並んで昔の気風がよく残っていますね。吉田松陰は、筑前人は軽佻浮薄であると評したそうですが、私はこれを、非常に住みやすい自由で寛容な風土という意味だと理解しています。そういう、保守的だが自由・寛容、人のいいのが取柄といった風土で育ったからこそ、私たちはアフガニスタンにいられたのではないかと。私は古い教育を受けた最後の世代ですが、かつて慣れ親しんだ考え方や情といったものを、水利事業などを通じて現地で見出すことがしばしばあり、この事業はやはり全国組織ではできなかったのではないかと考えています。私はこの九州ならではの自由・寛容な風土、気風を、これからも大切に残していくべきだと思います。

原田 パネリストの皆さん、そして会場にお集まりの皆さん、今日は長時間お疲れさまでした。またこういう機会を作りたいと思います。ありがとうございました。